

# みなとぴあの民具の収集

森 行人

前号に続いて、民具の収集について紹介します。みなとぴあでは、むかしのくらし展「布とむかしのくらし」を九月十四日から開催します。むかしのくらし展は開館以来毎年開催している企画展シリーズで、今年で十六回を数えます。民具を中心とした企画展で、地域の生活文化を伝えることを目的とします。小学校社会科には、地域のむかしのくらしを学ぶ単元があるため、多くの小学校が見学に来てくれます。一般の来館者をあわせると、毎年七千人から一万人の観覧者があるシリーズになっています。本展では、亀田縞や葛塚縞、小須戸縞など、各在郷町を中心に発展した綿織物業やその関連産業を紹介するため、当館が収集した紡織関係の民具だけでなく、各区で保存されている民具を借用して展示しています。

民具は地域が育んだ生活文化を伝える上で欠かせない資料です。当館のほか、今回資料をお借りした江南区郷土資料館、北区郷土博物館をはじめ、市内の様々な施設では、それぞれの地域で使われた民具を保存しています。ところが、たくさん集めてきた民具は形が一定でない上にかさばるものも多く、多くの収納スペースを必要とします。当館や他の多くの施設でも収納スペースがいっぱいになってきていま

す。民具には生活に関わる多様な物品が含まれ、多くは日々のくらしや仕事に使われた道具です。実用品は実用性を失えば無用の存在になります。多くは廃棄され、民具として集められ保存されているのはごく一部です。

そうだとすると民具を集める理由があります。それは、単になつかしさや希少性にあるわけではありません。(公財)日本博物館協会刊行『博物館研究』に民具の特集号(通巻五七八号)があります。ここでは、個人や研究機関、自治体、博物館・資料館など様々な主体が民具を集めてきたことふれ、その収集の動機について、①文化財保護や学術目的の体系的・継続的収集保存、②昭和四十三(一九六八)年の明治百年記念事業前後から、一種のブームとなった博物館・資料館の建設を契機とする収集保存、③昭和四十五(一九七〇)年の大阪万博前後の民俗ブームに促された収集保存、④昭和四十五年の「減反政策」への転換と、ほぼ同時期に進行した稲作への農業機械の導入により、役割を終えた古い農機具、生活用具の収集保存、と整理しています。また近年は、文化振興や地域活性化の一環として民具の収集事業が行われているとします。(岩野邦康二〇一六「どこまで、いつまで―民具の収集保存、継承の現状と課題―」前掲書)。

昭和四十年代は高度経済成長期の後半にあたり、くらしや社会・経済が大きく変化したことが、人々にも実感された時期であったと思います。収集の契機は一樣ではありませんが、民具の収集によって以前のくらしの在り様が後世に伝えられました。

何を民具として収集するのか、それを何を伝えるのか、民具の収集の対象と目的を当館の事業から具体的に紹介します。当館は昭和四十七(一九七二)年開館の新潟市郷土資料館が収集した民具を継承し、現在も民具を収集しています。まず、収集の対象に関して、文化庁の有形民俗文化財の考え方も参考にし、左記の方針で臨んでいます。時代あるいは地域の生活様式の特徴を示し、その変遷を把握・提示できる生活全般に関わるもの、また手工業等の職能の様相を示すもの、劇的に生活の変化をもたらしたものの、劇的に生活を示したものと、これらを資料として収集します。民具が使われる場所や状況のまとめ、一連の作業工程などを示すことができるよう、できるだけ体系的な、群としての収集に努めています。

次に目的について、特に力を入れて収集している低湿地の生産活動に関する民具を例に述べます。ご存知の通り、近代以前の新潟市域は大小の潟が

点在し、水害の頻発する土地でした。地域の主産業である稲作は、その多くが湿田でした。農業をはじめ、低湿地での生産活動を通じて特色ある技術が蓄積されました。船を使った農作業の写真を見たという方も多いでしょう。

しかし、低湿地の生産技術を具体的に知るための手がかりは意外に多くありません。そこで重要になるのが民具です。当館や市域各区の博物館・資料館等には乾田化以前の農業や生産活動の道具が収められています。平成二十四年度企画展「開墾の技術史 蒲原平野のたんぼとたけ」では、蒲原平野という沖積平野に広がっていた低湿地に、水田を開墾してきた歴史や技術を紹介しました。展示の中で、蒲原平野の各地域の開墾具・耕作具を比較しました(写真1)。



写真1 開墾の技術史展の民具の比較

特徴的なのが大型の鎌(写真2)です。この鎌はヤチキリガマ、イボキリガマ等と呼ばれます。ヤチと呼ばれるヨシの繁茂する湿地では、地下にヨシの根茎が層を成します。これら大型の鎌は、ヨシの根茎層を切断・除去するために使われたものです。興味深いのは、この大鎌の分布や呼称には蒲原平野の中でも違いが見られる点です。

例えば、北蒲原の平野部に立地する新発田市では、ブタキリガマと呼ばれる鎌を所蔵しています。これは福島潟北東部で使われたものです。福島潟周辺の阿賀野市や新潟市北区でもブタキリガマを所蔵しています。亀田郷の各区の博物館・資料館には、同種の大鎌が多く残されています。ここでは北蒲原郡と異なり、ヤチキリガマ等と呼ばれます。西蒲原の旧鏡潟以北は田潟・大潟・鏡潟という大きな潟があったことから三潟地方とも呼ばれます。現在西区・西蒲区・南区に含まれるこの地域でも同種の鎌が残されています。一方、鏡潟以南の上郷と呼ばれる地域や新津郷・白根郷では、この種の大鎌は残されていません。

実は、これらの大鎌は、水田の開墾に使わ



写真2 開墾用の大型の鎌

れたものです。開墾という潟の干拓工事のような大規模なものが想像されますが、個々の村や家単位で行われる小規模な開墾もあります。ヨシが繁茂するヤチは、こうした小規模な開墾の対象になりました。それを可能にしたのは低湿地の多い当地ならではの、ヤチの根茎を除去し、川や潟の底の堆積物を客土して水田を拓く技術でした。

開墾用の大鎌の分布については収集段階の事情も考慮する必要がありますが、地域的な傾向が見られることには理由がありそうです。企画展では、標高等の地理的要因、開墾の進展等社会的条件が異なることで、蒲原平野の中でも開墾に用いられた道具の伝世状況に差異が生じたことになりました。

次は全国的な視点で、低湿地の民具を考えてみます。魚を捕らえる漁撈具の一つに筥があります。竹や柳の枝などで編んだ籠状の道具で、ウケやドウ、モジリ等と呼ばれて北海道から沖縄まで全国各地で様々な形状のものが使われました。蒲原平野ではドウとかツツなどと呼ばれ、フナやナマス、コイヤヤツメウナギなどを捕らえる大型のものもあります。中でもドジョウを捕る筥はドジョウツツやタツベなどと呼ばれ、平野部の農村で広く使われていました(写真3)。かつて水田や用排水路にはドジョウが生息し、農家では稲作作業の傍らドジョウ捕りの筥を設置・回収、食生活や現金収入の足しにしていました。個々の家単位では生業という規模には至らない活動です



写真3 ドジョウを捕る筥

が、多数の農家が行うため蒲原平野部全体では特産品として県外市場に出すほどの漁獲量となりました。

水田稲作と淡水漁撈が深く関わっていることを論じた安室知さんは、水田という場が漁撈や狩猟、畑作を取り込んで稲作と並行して様々な生計活動を複合させていたと指摘し、特に水田周辺で継続的に繰り返すことが可能な漁撈を「水田漁撈」として捉えました(安室知二〇〇五『水田漁撈の研究 稲作と漁撈の複合生業論』)。水田及びその周辺でのドジョウ捕りは、蒲原平野部の低湿地の特色ある生活文化の一つです。同時に水田周辺でのドジョウ捕りは、水田耕作に伴って全国的に見られる生活文化でもあります。

これらの例が示すように、民具は地域で営まれてきた日々のくらしにおける、一つ一つの行為と、それらが各地に

どのように分布するのかわかりません。日常の営為は、その当時には自明のことであっても、時間の経過と共にわからなくなってしまうものです。社会の在り様が大きく変化した以前の生活文化を問い直すのは、さらに困難ですが、その手がかりとなるのが民具です。一つの地域の民具を丹念に収集し、それを出発点に、同種近縁の民具分布を地域的な範囲や時系列などの視点から比較することで、生活文化の分布の広がりや変遷が明らかになり、その普遍性や独自性を知らることができそうです。国の重要有形民俗文化財の中には、地域で営まれてきた生活・生業に関わる民具類を網羅し、それによって地域性やその特色を位置付けた資料群があります(例えば二〇一七年指定「砺波の生活・生産用具」六九〇〇点)。民具の収集と比較の重要性を教えてください。

当館でも、民具を新潟市域の生活文化を伝える資料として位置付け、収納スペースにも限りがある中で、収納の効率化を図りながら、可能な範囲で保存・収集・活用することを使命と考えています。

(もり ゆきひと 学芸員)